

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 16 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22531064

研究課題名(和文) 発達障害の「特性モデル」を考慮した通常学級の授業づくり方法とその効果に関する検討

研究課題名(英文) Lesson studies based on the characteristic model of developmental disabilities for regular classrooms

研究代表者

宇野 宏幸 (Hiroyuki, Uno)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：20211774

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害(LD、ADHD、自閉症スペクトラム障害)の認知・行動特性や対象児のアセスメント情報を考慮した通常学級における授業づくりモデルに関する検討をおこなった。対象児およびクラス全体への効果について、授業参加・理解度ならびに動機づけ(特異的自己効力感)の観点で評価した。対象児においては、授業内容理解および動機づけの向上が認められた。一方、クラス全体については顕著な変化はなく、今後の検討課題となった。

研究成果の概要(英文)：I examined the lesson study model for regular classrooms in consideration of cognitive and behavioral characteristics in developmental disabilities (LD, ADHD, autism spectrum disorders), and of the individual assessment information. I evaluated the efficiency of the model in the view point of the degree of participation and of the comprehension, and of the motivation (specific self-efficacy) both for the candidate children and the whole class. Improvement in the degree of comprehension and motivation was recognized for the candidate children. On the other hand, there was no remarkable change for the whole class, and it became a future examination subject.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：特別支援教育 発達障害 通常学級 授業づくり 自己効力感

1. 研究開始当初の背景

(1) 発達障害児が在籍する通常学級では、これらの子どもへ配慮したわかりやすい授業をおこなっていくことが求められつつあり、ユニバーサルデザインの考え方に基づく視覚的な支援や配慮が実施されるようになってきた。このような工夫をすることで、子どもの理解度を向上させることに一定の成果が得られている。しかし、これらの配慮はわかりやすさを支援するものであっても、発達障害児が授業の単元内容を十分に理解する手だてとはなり得ていない。

(2) そこで、本研究では発達障害の特性に関する心理学的、脳科学的研究から提案された「特性モデル」に基づく授業手続きを採用することで、まず、発達障害児において1) 授業内容理解が促進されるのか、2) さらに学習に対する満足度や動機づけかが高まるのかどうか、について検証を試みる。第二に、「特性モデル」による授業手続きがクラス全体に対して効果を生むのか、つまり多様な教育ニーズにも対応できるかどうかについて検証する。

(3) この背景には、発達障害と「健常」は離断されたものではなく連続しているという最近の障害観がある。代表的なものが、自閉症スペクトラム障害 (ASD) という概念であろう (Wing, 1996)。この考え方によれば、社会性の基盤となっている能力が高い子どもから低い子どもまで連続的に分布し、極端に低く社会生活上での困難をともなう場合に障害と見なされる。これが正しいとすれば、自閉症の特性へ配慮した授業を展開すれば、ASD 児だけでなくその周辺児への教育的効果が期待されるであろう。

(4) 発達障害を説明するモデルは数多いが、最近とりわけ注目を集めているのが自閉症に関する「心の理論」である (Baron-Cohen, 1989)。この理論では、ASD 児は他者の考えや欲求を推測することに困難があるために社会性が損なわれてしまう、と説明される。このような心的機能は国語の文章読解とも深く関連しており、登場人物の気持ちを理解する学習にあたっての基礎的な力と考えることもできよう。したがって、「心の理論」が損なわれていると、文章の理解につまずきを示すことになる。本研究では、「心の理論」などの発達障害に関する「特性モデル」を考慮した授業方法の工夫を設定する。

2. 研究の目的

(1) 発達障害に関する「特性モデル」に基づく授業づくりは対象児に効果的か

特性へ配慮することで、対象児への効果が期待される。この評価にあたっては、最終的な学力テスト得点の変化だけではなく、そのプロセスを重視する。授業内容の理解度、満

足度、動機づけ、注意力、自己効力感や自尊感情の変化によって多面的にその効果を検証する。

(2) 発達障害に関する「特性モデル」に基づく授業づくりは他の子どもに効果的か

ある程度の特性をもついわゆる「周辺児」を含めて、クラスの他の子どもにとってもわかる授業になっているかどうか、検証する。発達障害児の場合と同様に、子どもの内的プロセスを重視する。

3. 研究の方法

(1) 授業案作成：発達障害児が在籍する小学校高学年の通常学級担任と、国語や算数などの単元に関する授業案作成を特性モデルに従い共同でおこなう。

(2) 授業記録：複数のビデオカメラで授業を同時撮影するとともに、子どもを対象に単元内容の理解度、自尊感情、自己効力感などに関する事前・事後アンケートを実施する。

(3) 特性の調査：担任へ子どもの行動特徴について回答を依頼する。

(4) 分析：撮影したビデオを合成して教師-子ども間の相互作用を時系列的に分析するとともに挙手や発言回数を定量化する。あわせて、授業中のワークシートへの記述について質的分析やアンケート調査についての定量的分析をおこなう。

(4) 考察の観点：授業分析結果と特性調査の関連性から、「特性モデル」による通常学級の授業方法が有効であったかどうか検討する。

4. 研究成果

(1) 自閉症スペクトラム障害：「心の理論」を考慮して、物語文（「モチモチの木」「ごんぎつね」など）における心情理解を促進するため、授業案にロールプレイ、視覚的な文脈理解の工夫（マインドマッピング）などを盛り込んだ。

対象児は、NU 式行動チェックリストで見ると、コミュニケーションや文脈理解に課題が大きく、自閉症スペクトラム児に見られる一般的な傾向と一致していた。

読解力を見るためのワークシートの得点を授業前後で比較すると、クラス平均は 14 点前後でほとんど変化がなかった。一方、対象児の得点は 3 点から 11 点へ大きく伸びていた。また、自己効力感の得点を前後で比較すると、クラス平均はほとんど変化が見られなかった一方で、対象児については 10 点近い向上が見られた。

これらの結果は、対象児の特性に考慮した個別のワークシート、授業中の動作化への積極的な参加、視覚的な支援の効果として、対

象児本人において物語文の理解が促進されたことが大きいと考えられた。また、授業中の成功体験や達成感が特異的な自己効力感の向上をもたらしたものと思われる。

(2)AD/HD :

AD/HD のある子どもが在籍するクラス担任を対象とした授業づくりコンサルテーションを実施して、その効果について検討した。

発話内容の変化の定量分析

教師が対象児の行動や学び方に対して、対象児のニーズを捉えている発話や教師が考える対象児のニーズに応じた指導の工夫に関する発話を『特性理解』とした。各回の総件数における割合の推移で表すと、教師の『特性理解』の発話は増加傾向を示した。

展開に伴う質的变化の比較

特性理解の気づきの深まり方が、手立ての内容によって違いがあることがわかった。

コンサルテーションにおける発話の質的分析

教師が効果を実感した視覚支援の手立てを学習のルールや学習内容理解のために応用していることがわかった。

コンサルテーションにおける発話分析

ビデオ視聴とともに視点のプロセスとして、1)事実の確認、2)事実の焦点化、3)視点の提供、4)変化の認識、5)評価(承認)で対話をする、教師の気づきを促すことに有効であることがわかった。

担任の行動の変容

具体物の提示や活動の設定があると、教師が対象児のもとに行って、個別的な関わりをする時間が少なかった。第2期になると授業の中に具体物や活動を取り入れることが増えてきた。

対象児とクラス全体の行動変容

書く時、聞く時の区別がなく、教師の発問や指示、説明の時にノートを書くなどして、対象児の話を聞けなかった子どもたちが、かくかくカードや興味をもつ課題提示や活動を取り入れたことで、注目することと活動することを区別して学習することができるようになった。

担任の承認の発話の変化

4 月当初、特に算数科の時間では、教師の承認の発話は少なかったが、承認する機会をつくる提案を受けて、教師の子どもたちへの承認の発話が全体的に増加した。

対象児の言動の変化

学習のルールの定着、ペア学習の取り組みの中で特に対象児の「好ましい友達との関わり」が増加した。

学校生活満足度の結果の変化(2 回目は7 月6 日実施)

対象児はさらに被侵害得点が2 点下がり、属性は学級生活満足群であった。対象児2 は、承認得点が4 点上がり、被侵害得点が8 点下がり学級生活満足群に近い位置にプロットされた。クラス全体では学校生活満足群が3

0 %から60 %と上昇した。

考察

ビデオ視聴とともに担任の振り返りを援助する対話を行うことは、担任の気づきが促され、対象児への特性理解が深まり、担任の主體的な授業の工夫が展開されることにつながったと言える。また、それは担任の教示行動の変化につながり、さらには子どもの変容につながることに有効であることが示唆された。

(3)LD:授業案には、文章題の視覚的な理解の工夫とくにイメージ化方略の使用、ロールプレイ、興味を引く具体物提示などを盛り込んだ。

小学校2年の対象児は、NU式行動チェックリストで見ると、コミュニケーションや文脈理解に課題が大きく、自閉症スペクトラム児に見られる一般的傾向と一致していた。また、個別的な指導の際には比較的理解も良く、指導内容も定着する傾向にあった。その一方で、在籍する通常学級での授業内容の理解は難しいようで、学力面での課題が顕在化していた。

通常学級での授業においてまず大切なのは、子どもの注意を引く授業の工夫があるかどうかである。教室全面から撮影したビデオを分析したところ、口頭での説明が長くなるにつれて、子どもの注意力が持続しない傾向となる一方、子どもの興味をひく具体物の使用や作業をともなう時間では、注意力が保たれていた。これについて、クラスの傾向と対象児の振る舞いは一致していた。

また、本研究では、対象児に文章題の言語的理解力が低いという見立てを得て、視覚的にイメージ方略を使用するよう追加のワーク課題を実施した。その結果、授業でのつまずき箇所の理解が促進されていった。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

宇野 宏幸、自尊感情、自己肯定感、自己効力感を高める指導・授業づくりを考える、発達障害研究、査読無、35 巻、2013、287-295

〔学会発表〕(計 8 件)

宇野 宏幸 他、自主シンポジウム「通級指導と協働するクラスの授業づくり・学級経営」、日本 LD 学会第 22 回大会、2013 年 10 月 14 日、パシフィコ横浜

竹内 康哲・宇野 宏幸、中学校における通級の指導を活かした教科協働型授業研究会、日本 LD 学会第 22 回大会、2013 年 10 月 14 日、パシフィコ横浜

宇野 宏幸 他、自主シンポジウム「発達障害研究と支援の最前線」、日本教育心理学会第 54 回総会、2012 年 11 月 24 日、琉球大学

宇野 宏幸 他、大会企画シンポジウム「授業のユニバーサルデザイン化への挑戦」日本 LD 学会第 21 回大会、2012 年 10 月 7 日、仙台国際センター

宇野 宏幸 他、自主シンポジウム「特別支援教育の視点による通常学級の授業づくり方法論」日本 LD 学会第 21 回大会、2012 年 10 月 7 日、仙台国際センター

宇野 宏幸 他、自主シンポジウム「教育委員会が進める特色ある通常学級の授業づくり」日本 LD 学会第 20 回大会、2011 年 9 月 17 日、跡見学園女子大学

木下 裕紀子・宇野 宏幸・鋒山 智子、特別な教育的ニーズを持つ児童が在籍する通常学級における授業作り、日本 LD 学会第 20 回大会、2011 年 9 月 17 日、跡見学園女子大学

森永 勇芽・宇野 宏幸、発達障害児の「集団への所属感」を高める個別指導と CSST、日本 LD 学会第 20 回大会、2011 年 9 月 19 日、跡見学園女子大学

〔図書〕(計 1 件)

宇野 宏幸 他、金子書房、特別支援教育から考える通常学級の授業づくり・学級経営・コンサルテーションの実践、2013、212

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇野 宏幸 (UNO, Hiroyuki)
兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：20211774